

ハイスクールD×D 白銀の少女

腐ってない女子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルシファアの血を受け継ぐ少女がいた。その少女は辛い過去を持っていた。その過去の記憶から救ったのは・・・

目  
次

## 1話

「おはよう。ヴァーリ！」

「今日も来たんだ。イツセー？態々、私のところに来なくてもいいよ？」

「ううん。ちゃんと、来てるか確認しに来たんだから・・・」

「そっか。」

そう。イツセーは毎日ここに来て、私に会ってから、教室に行くのだ。態々、来なくても言うが、確認と言って、毎日来るのだ。

「ヴァーリも教室に行こうよ！みんな、待ってるよ？」

「うん。気が向いたら、行くよ。」

「そんなこと言って、絶対来ないじゃん！」

毎日このような会話をしてはイツセーは落ち込んでいる。可哀想だけど、落ち込んでいるイツセーはすごい可愛い。

「むう！なんで、いつも私の頭を撫でるの？」

「ごめんごめん。でも、イツセーが可愛いのがいけないんだよ。」

「うう！私は別にそんな・・・」

「はい！ヴァーリ。私の頭を撫でたんだから、教室に行きましょう！」

あ！騙された。くそう・・・無念・・・くはっ！

「ヴァーリ？どうしたの？」

「ちよつと、おなかが痛くなったから、お手洗いに・・・」

そう言って、逃げようとしたら、腕を引っ張られた。

「うそでしょ？私もそんな簡単に騙されないよ？」

「はい・・・すいませんでした。でも、今日だけだからね？」

「うん！」

そんなことがあり、教室に向かった。

「きやあ！ヴァーリさんよ！今日も綺麗だわ！それに我らの癒しである。イツセーさんも一緒に・・・」

「やっぱり、ヴァーリがいると、騒がしさがいつも以上だね。」

「違うよ。イツセーが可愛いからよ。」

そんなことを話しながら、教室に入った。

「おはよう！みんな」

「おはよう。」

「『おはよう！イッセー、ヴァーリさん』」

なぜ、イッセーは呼び捨てで私は、さん付け？まあ別にいいけど：

「それより、今日はヴァーリさんも来たんだね。」

「うん。イッセーに騙されて・・・」

「ひどいよ！ヴァーリい。別に騙してないのに・・・」

やばい！イッセーが泣いてしまう。イッセーが泣いたら、裏で動いている。イッセーを愛し隊の人たちに何をされるかわからない。

「ごめん。イッセー！謝るから、泣かないで！」

「本当？」

「もちろん！」

「うん！」

イッセーは涙目ながらも、眩しすぎる笑顔でこちらを見てきた。やばい！なぜか、抱きしめたくなる。そんなことを考えていると、無意識にイッセーを抱きしめてしまった。

「ヴァーリ？あうっ！」

「『きやあ！ヴァーリさんとイッセーが抱き合っているわ！誰か、写真よ。高く売れるわ！』」

「やばい！分厚い本がまた分厚くなるわ。」

ちよおとまった。分厚い本について、じつくりとO☆H A☆N A ☆S H I しないといけないね。

「その、ヴァーリ？まだ？」

「うん。もう少しだけ・・・」

イッセーは顔を真っ赤にして、私に問いかけた。

「おーい！授業を始めるぞ！席に着け。おっと、これは失礼・・・少し待ってよう。」

「いや、先生・・・止めてくださいよ。恥ずかしくて死にそうです。」

「無理だ。こんな貴重な時間をなくすなんて・・・私にはできない。」

「ほんとに恥ずかしいから、もうやめてよお！」

「仕方ないなあ。これで我慢しよう。」

そう言つて、私はイツセーの額にキスをした。

「じゃあ、先生。授業を始めてください。」

「おう！おいお前ら！席につけ。松田と元浜は後で職員室に來い！」

「なぜ!」

「じゃあ、授業を始める。」

そんな感じで授業が始まり、みんな静かになったところで、私はヘッドホンをした。気づいたら、目を閉じ、眠りついていた。

「リ！ヴァーリ！」

イツセーの声が聞こえる。しかし、目を開けられない。そして、とても体が重い、なぜだろう・・・

「ヴァーリ！大丈夫？」

やっと目を開けて、体を動かすことができた。

「ずつとうなされてたよ？クラスの子ども心配してたし・・・それに、すごい汗だよ？大丈夫？」

「うん。平気」

立とうとすると、立ちくらみがして、うまく立てない。

「ヴァーリ？大丈夫？家まで送るよ？」

「うん。悪いけど、お願い。」

「うん！」

イツセーの肩を貸してもらい、校門まで行くと、声が聞こえた。

「あの！兵藤一誠さんですよ？私、天野夕麻っています。」

「うん。そうだけど・・・」

「やつぱり、あの・・・貴方のことが好きです！付き合ってください。」

「えつと・・・女の子だよね？」

「はい・・・でも、その・・・」

この気配は・・・堕天使ね。イツセーの神器を狙ったのかしら・・・  
「ごめん・・・なさいね。イツセーは私と・・・付き合っているから・・・」

「そうなんですか？」

「えーと・・・」

私は話を合わせなさいと言うように、イツセーの服を引っ張った。  
「そうなんです。私たち付き合っているんです。だから、ごめんなさ

い。」

「じゃあ．．私たち、急いでいるから．．．」

この場はお願いだから、見逃してくださいな。

「待ちなさいよ。逃がすわけがないでしょ！」

くそお．．．やっぱり逃がしてはくれないか．．

「何？」

「貴方にいい思いさせてあげてから殺そうと思ったのに：まあ、いいわ。今殺すしね。」

そう言つて、堕天使は光の槍を生成した。

「イツセー．．私の後ろに．．」

「でも．．」

「大丈夫。私は．．」

「．．わかった。」

イツセーは素直に私の後ろにつてくれた。その間にも、堕天使が生成している槍はどんどん大きくなっている。

「ふん。貴方、苦しそうだけど、大丈夫？まあ、どちらにしろ助からないけど．．」

そのようなことを言つて、生成した槍を投擲した。イツセーを守るためならいつか．．

「来て。アルビオン！」

〈了解した。〉

投擲された槍は私が発動した神器によって阻まれた。

「な!? 貴様、まさか、白龍皇!?!」

「残念だけど．．そういうことよ。」

少しだけ、魔力を開放して、相手に放った。その魔力弾は堕天使に当たると、堕天使が一瞬で吹っ飛んだ。

「イツセー：説明は後です。だから、いまは帰るよ。イツセーの家にお邪魔してもいい？」

「うん。でも、それより、早く休まないと：ヴァーリすごい顔色が悪いよ。」

「大丈夫．．すぐに治るから．．とりあえず、行きましょう。」

「うん。」

そう言つて、イツセーの家に向かった。イツセーの家は学園から近く、私の家よりも近いので、すぐについた。

「少し待つてて、お茶いれるから・・・」

「うん・・・ありがとう。」

「あ、いいよ。適当に座つててね。」

「わかった。」

イツセーは部屋を出て、お茶を入れに行つた。一応、結界とか張つてたほうがいいよね？そう思い、魔力をつかつて、結界を張つた。

「ヴァーリ、おまたせ。茶葉が少なくて、薄いかもしれないけど・・・」

「うん。ありがとう！」

「それで、ヴァーリ。さっきのは何？」

「あれは、墮天使だよ。」

「墮天使？」

「そう。」

イツセーは興味深そうに聞いた。だが、これを聞いてしまつては二度と、元の世界には戻れない。

「イツセー。まず、この世界には神、悪魔、墮天使、人間、妖怪、ドラゴン等、色々な種類の生き物がいる。さっき襲つてきたのは墮天使よ。墮天使は神側の天使などが墮ちた者。そして、悪魔は身近にいるわ。この際だから言つておくね・・・私は悪魔だよ。そして、ほかにも有名なりアス・グレモリー・・・それから支取蒼那も悪魔よ。ごほっ！ごめんなさい。今日はここまででいいかしら？」

「うん。大丈夫だよ！でも、とりあえず、話してくれてありがとう。」  
「うん。」

「ごめんね。まだ、続きは明日にでも、話すから・・・」

「わかった。今日は泊まつていつていいよ。」

「うん。泊まらせてもらうね。」

「お風呂を沸かしといたから、入つていいよ。」

「うん。」

そういえば、着替えないよね。イツセー、貸してくれるかね？



「着替えがないよね．．下着なら、かしてあげるよ？」

「イツセーのじゃ、サイズがねえ．．」

「貧乳ですよーだ！」

そう言つて、イツセーは落ち込んでしまった。

「イツセー、貧乳はステータスだつて、言つてゐる人がいたよ？」

「そうなんだ。いいよね、ヴァーリは大きくて．．」

「それは、私は半分悪魔だし．．．」

「やっぱり、悪魔は魅力的だよね。」

そんな話をした後は何もなく1日が終わった。